

## 平安朝物語の性格

——源氏物語を中心として——

竹 野 長 次

日本の古代に語部と称する伝承詩人・吟遊詩人の一群があつて、神話伝説などの昔物語を保持してゐ、それを語り歩いた。そして広い社会層に文芸的教養を与へると共に、国民的教養の基底条件である「やまと言葉」を全国的に流布する役目をつとめてゐた。北山抄には「語部奏古詞」「其音似祝詞、又涉歌声」と言つてゐる。して見ると「語る」といふのは、単に話すことではなく、一種の曲節を付け調子をとつて歌つたことのやうに思はれる。平安朝時代の物語も、語部によつて語られた昔物語の系統を引くもので、口誦的性格を有つてゐ、どの物語もその冒頭には、その物語が昔の世の事を描いたものであることを示す為めの、「いづれの御時にか」「昔男ありけり」といった語句を置き、終末は「言ひ伝へたとなむ」といつた、その物語が自分の直接の見聞や創作ではないことを断る意味の語句で結んでゐる。斯して物語そのものは伝承的形態を持つてゐ、作者は伝承者の立場を堅く執つてゐるのである。物語は、本質的には客観的叙事的文芸である。本来、物語の「もの」は、見るもの聞くものを意味するのであつて、客観的存在を指示する語であり、「語る」は谷川士清が、「言語によりて其象あらはるを以つて言ふ

なるべし」と解いてゐるやうに、言語で或る形象を表現することをいふのである。随つて物語は客観的な事象を対象とし、それを叙述するに当つては具象的表現を与へようといふ知的態度に出てゐるのであつて、抒情詩とは自らその領域を異にするものである。

源氏物語は光源氏を中心とした世界を流動の姿に於いて純客観的に描いてゐるだけではなく、抒情味が濃厚に漂つてゐて、叙事詩的な平家物語よりも叙事性が稀薄である。この抒情性の豊かであることの一つの理由は、それが愛の文芸である点にある。作者紫式部の意図したところのものは、恋愛生活を通して人間性の眞実を描かうとすることにあつた。内面的な感情の機微を、微妙な人情の動きを、精細に如実に写し出さうとするのが目的であつた。勢ひ愛の生活の上に揺曳する喜び悲しみ愁ひ悩みの影が、しめやかな情調に掩はれて描かれてゐる。茲に抒情性の豊かな理由があるのであつて、この物語の魅力もまたこの点に存するのである。

然し物語そのものの内容から自ら醸し出される情緒的要素とは別に、物語の展開といふ観点から、源氏物語を考察する場合、その抒情性に就いては歌物語や日記文学との関聯を見逃す訳には行かない。平安朝の文学は抒情文芸から叙事文芸へと展開してゐるのであるが、その展開過程に在つて、所謂、歌物語と称される最初の作品である伊勢物語が大きな光芒を文学史の上に放つてゐる。和歌は感情の興奮した瞬間を捉へて表現したもので、複雑微妙な感情生活の起伏曲折を流動の姿に於いて連統的に表現することは不可能である。然も人々は自我の自覚と知性の深化とに伴なつて、さうした抒情詩の世界だけで、自分の文芸的欲求乃至興味を充たして居る訳には行かなくなつ

た。断片的な抒情詩の示す世界以外の、もつと広汎な具体的な現実世界への思慕や興味が、心の底に動いて来た。つまり日常生活の中に生き行く人の真実の姿を探求し観照しようとする欲求が強く湧いて来た。こゝに歌物語の作られる理由が存在した。

一方、平安朝の物語には、古代叙事詩の世界言ひかへれば伝誦的物語に源流を持つ竹取物語と、抒情詩の世界に依拠してゐる伊勢物語との二系統があり、この二つの系統は宇津保物語によつて統一されてゐる。然しこれは文学が発生した母胎についての相違であつて、かうした発生の事情を別にして、吾国の物語は多くは歌をその中に包含してゐる。記紀の歌謡は皆物語の中にその位置を与へられ、歌謡のもつ情緒的世界は物語的背景のもとに享受され、物語そのものの雰囲気の中で観照されてゐる。斯くて記紀に記載されてゐる幾多の歴史的事件を伝へる物語には、歌謡がその中心的位置を占めて、物語の情緒性を豊富にしてゐるのであつて、この点、歌物語的性格をもつてゐる。たとそこれらの物語に在つては、単に叙事的叙述の中に抒情性を含んでゐるといふだけで、物語と歌謡とが異質的ではな<sup>く</sup>になつてゐ、両者の間には内面的融合が見られない。散文的叙述は歌謡自体の持つ意味内容に限定を与へ、それを明確にする支柱の役目をし、歌謡を観照する足場を提供してゐるに過ぎないのである。

然るに伊勢物語を見ると、散文的叙述は和歌と同じ水準に立ち、歌と物語とが情緒的に融合し統一されてゐる。本来、歌はそれ自体の中に、読者をして物語的世界を想像させるに足る或る要素を持つてゐる。言ひかへると、人は一首の歌を読む時、作者の心境に味到し、同時に自分の体験を想ひ起して、内的生命を燃焼させ、幻想の世界を描き出すのである。かうして歌から受けた感銘・印象に基いて、自由に想像の翼を伸し、心裏に描き出した一つの纏つた世界に散文的表現を与へ、その散文的叙述と有機的關聯に於いて物語的構想の中心となつた歌を撰取するの

であつて、茲に歌物語が成立するのである。

(萬葉集卷十五の後半は、中臣宅守と茅上娘子との贈答歌六十三首でうめられてゐる。それらの歌は二人の恋愛生活に於ける感情の、昂められた頂点を表現してゐるに過ぎないものであるが、読者はこの一群の歌を読んで、作者の燃え立つてゐる生命に触れ、自分の体験を喚び起して自分の内的生命を燃焼させる。斯くて夢幻・幻想の境地に自らを置くやうになる。時間的に配列されてゐる六十三首の歌には、物語的叙述は隠されてゐるが、この一群の歌の背後には、それが縹渺として掃曳してゐるのであつて、ここに抒情詩から歌物語への展開過程が見出されるのである。)

さて古事記に記載されてゐる説話の中に源流をもつてゐる、物語と歌謡、叙事的部分と抒情的部分とが、外面的結合から内面的融合にまで到達し、情緒的に渾融した所に、平安朝の歌物語の誕生があるのであるが、この歌物語が「宇津保」や「源氏」などの物語の中核となつて、平安朝物語の性格を規定してゐる。のみならずこの歌物語的形態は、当時の日記文学の中にも流れ込んで、「日記」は日記であると同時に歌物語の連続集積でもある。

源氏物語の中には、歌だけを抜き出しても一大歌集となる程の、多くの歌が詠み込まれてゐるのであつて、それらの歌を中心に、その詠まれた場面なり経緯なりの叙述を、一とくぎりのものとして見ると、それは美しい歌物語である。例へば、夕顔巻の終の、「伊予介、神無月のついたち頃に下る云々」とある、源氏の君が恋々の情を寄せてゐた空蟬は、つひに夫と共にその任国に旅立つやうになつたことを叙した一節を読んでも、黄昏の垣根に夕顔の花が白く浮んで見えた、五条の宿に見出した、線の弱い可憐な美女とは、河原の院で奇怪極まる死別をし、今また恋ひつゞけて來た空蟬を遠い田舎に送らねばならない源氏の君の、切ない哀愁が、底知れぬ悲寥の情が、折からの

時雨の空を背景に描き出されてゐ、その中に詠まれてゐる三首の歌は、裝飾的に挿入されてゐるのではなく、散文的叙述と情緒的に融合して、抒情味の豊かな歌物語を構成してゐる。

「伊勢」の歌物語的形態が源氏物語の構成に参加してゐるばかりでなく、また「伊勢」の中に語られてゐる話が「源氏」の作者の構想に影響を与へてゐる。「伊勢」の第一段の初冠の条は、垣間見の恋であるが、これは「源氏」の若紫巻で、源氏の君が霞のかゝつてゐる夕暮に、北山の小柴垣のもとに立つて、美しい少女を垣間見た話、野分巻で、十五歳の夕霧が野分の物凄く吹き荒れた秋の日に、今まで曾て見たことのない紫上を、妻戸の隙間から覗き見て、思慕の情を募らせた話、若菜巻上で、弥生の空のうらゝかに晴れ渡つた日、六条院では蹴鞠の会が催された。その折、柏木は簾の隙間から不図女三の宮の美しい姿を垣間見た。それがぎつ、かけとなつて悲劇的運命にまで發展する話、或は宇治十帖の椎本巻の終にある、宇治を訪ねた薫の君が、風で吹きあげられた簾の隙間から姉妹の姫君の美しい姿を垣間見た話、東屋巻で、中の君の許を訪れた匂宮が、西の對の障子の細目に開いてゐる間から、浮舟を見出した話など、矢張、「源氏」の中でも垣間見の恋がいくつか語られてゐる。

「伊勢」の第四段は、二条の后と業平との、有名な恋物語である。当時、后はまだ五条の太后の許に養はれてゐて、入内する前の出来事である。この物語は源氏の君と朧月夜との關係を聯想させるに充分である。また第十四段は、陸奥での恋物語であつて、女は愚かに幼稚な、品位も教養もない田舎者であつた。「三十文字」にも足らず、本末あはぬ歌、口疾くうちつゞけなど」する近江君は、この田舎女の仲間である。第廿一・二の面段には、家出女の話載せてある。紫式部は帚木巻で「艶にもの恥ぢして、恨みいふべきことをも見知らぬさまに忍びて、上はつれ

なくみさをつくり、心一つに思ひあまる時は、いはむ方なくすぎ言の葉、哀れなる歌を詠みおき、忍ばるべき形見を留めて、深き山里、世ばなれたる海づらなどに、はひ隠れぬかし。云々」と家出女について批評してゐるが、これは「伊勢」の物語を念頭に置いたものであらう。

第四十九段は、妹に懸想した物語であるが、総角巻には次のやうな話がある。「時雨いたくしてのどやかなる日」匂宮は妹の女一の宮のお部屋を訪ねた。折柄、妹宮は「御前に人多くも侍はず、しめやかに御絵など御覽」んになつてゐた。その周囲には沢山の物語絵が散らばつてゐた。それらの中に、「在五が物語書きて、妹に琴教へたる所の、人のむすばむといひたる段を描いた絵のあるのを見て、宮はどう思つたか、妹宮の傍に近寄つて、「古へ人もさるべき程は、隔なくこそならはして侍りけれ。いと疎々しうもてなさせ給ふこそ」と、小声で仰せられた。そしてこれが実の妹でなく、多少なりと縁の薄い女であつたならばとも、思ふのであつた。

第六十一段には、つくも髪のお女と業平との恋愛が語られてゐる。紅葉賀巻にも、六十に近い源内侍、それは恐しく多情な女であつたが、それと源氏の君との恋物語が見えてゐる。また第六十八段も、狩の使に伊勢国に行つた優男と斎宮との、夢にも似た艶に淡い恋物語である。春の夜は更けて、外には月が朧ろに霞んでゐる。二人は夢幻的な逢ふ瀬を楽しんだのであるが、これは源氏の君と藤壺との物のまぎれを想ひ浮べさせる。

なほ第七十二段には、「昔男、そこにはありと聞けど、消息をだに言ふべくもあらぬ女のあたりを歩いて」といふ詞書がついて、「目には見て手には取られぬ月の中の、桂の如き君にぞありける」といふ歌が載せられてゐる。これは住む世界の異なる麗人への思慕の嘆を述べたものであるが、この「昔男」の心情は、源氏の君の藤壺に対する切ない心に似てゐる。花の宴が終つて、折柄、「月いと明うさし出で」風情の深い夜であつたので、源氏の君

は「酔ひ心地に見過し難く覚え」て、「もしさりぬべき隙もやあると、藤壺わたりを、わりなう忍びて窮ひ歩き給ふ」のであつた。(花宴巻)

以上の外、「伊勢」が極めて部分的ではあるが、「源氏」の構想を助けてゐると思はれるふしも尠なくはない。祖母の許で一緒に養育された夕霧と雲井雁との、幼馴染の親しさが、やがて恋にまで成長する物語は、「伊勢」の第廿三段の筒井筒の物語が聯想されるし、天の下の色好みである源至が、闇の中に立つてゐる女車に近づいて、隠し持つてゐた螢を車の中に投げ入れて、女の顔を見ようとした話は、螢巻に語られてゐる、螢兵部郷の宮が玉鬘を訪れた時、居合はせた源氏の君が几帳に近寄つて、垂れさがつてゐる帷子を横木に刎ねかけると同時に、用意して置いた螢の包をさし出した。宮はほのかに明滅する青い光の中に、玉鬘の美しい姿を見て、悩ましい思ひを募らせた話を想はせる。尤も「宇津保」の初秋巻にも、帝が螢の光で尙侍を御覧になる話が載せられてゐる。

「伊勢」には、ひそかに連れ出した女を、芥川のほとりにある荒廢した倉の中に入れて、夜明けを待つ間に、鬼が女を喰つて終つた物語があるが、これなども、夕顔巻の、線の細い、か弱い性格の女性性が、河原院で怨霊に取り殺された話と、全然關係がなくはない。また「伊勢」の第六十四段には、帝の寵愛を受けてゐる女と熱烈な恋に陥ちた男が、後は流罪に処せられ、女は実家に引取られて倉の中に幽閉される物語があるが、これは源氏君と朧月夜との關係、そして須磨への配流の物語に暗示を与へてゐるのではなからうか。また「伊勢」には、つくも髪の老婆が子供三人を集めて、見もせぬ夢物語をする話があるが、若紫巻で、源氏の君は北山で、僧都の庵室を訪ねて、夢物語をするのであつた。また帚木巻で、空蟬は源氏の君に向つて恋の相手について「きははきはとこそ待るなれ」と言つてゐるが、「伊勢」には、「おうなく思ひはすべしなぞへなく高く卑しき苦しかりけり」といふ歌がある。

物語にはそれ／＼の物語の主人公に寄托され、それによつて主人公の地位を輝かしいものにしてゐる理想性といつたものがあり、その理想性が全篇に浸透して統一を与へてゐると思ふのである。竹取物語の赫耶姫には、永遠に滅びない処女の純潔に対する礼讃の心が示されてゐる。「宇津保」の貴宮にはこの世の中で最も貴いものとしての女性美が、仲忠には音楽美讃仰の心が寄せられてゐる。また「落窪」の落窪姫は倫理的な完璧な女性として描かれてゐる。源氏の君は「思し到らぬことなき御心ばへ」の持主で痒いところに手の届くほどの、行き届いたそのない心遣ひをする、思ひ遣ひの深い人物であつた。そして「見しあたりの情けは過し給はぬ」で、一度契りを結んだ女性に対する情愛は、永久に忘却の彼方に捨て去らない、濃やかに博大な愛情を持つてゐた。のみならず「物の心得てうしろ、安き方はこよなかりなむ」で、物事に対する理解が深く、その点、誠に安心の出来る人物でもあつた。

この博大な愛情の持主である源氏の君は、西方浄土にいます阿弥陀如来の攝取不捨の大慈大悲の御心を、人間界に具現させたものであり、善美をつくした壮麗宏大な六条院は、愛の浄土をこの世に出現させたものであり、源氏の君は愛の浄土の救世主の地位に置かれたのである。然しまた一方から見ると源氏の君の博大な愛情、思ひやりのある心、物事に対する深い理解は、「世の中の例として、思ひ思はぬ人あるを、この人はそのけぢめを見せぬ心なむありける」と言はれた「昔男」の愛情の発展したものではなからうか。

更に「伊勢」は「昔男」によつて代表される一男性の恋愛生活の記録であつて、「初冠」の段から始まつて、「昔男、京をいかゞ思ひけむ東山に住まむと思ひ入りて、住みわびぬ今は限りの山里に身を隠すべき宿求めてむ。

……まことに限りになりける時、つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」といふ終焉



の段で結んでゐる。源氏の君も十二歳で元服し、その夜、葵上を添臥とした。その後、猟奇的な恋愛道をさ迷うた拳句、「のぼりにし雲居ながらも顧みよ、われ飽き果てぬ常ならぬ世に」（御法巻）と、無常の世を厭離して、信仰生活を志した。然し「昔男」は水草清き山林寂寞の境に隠れて終はなかつたし、源氏の君もまた出家の志を遂げなかつた。たゞ「昔男」は辞世の詠を残して絶え果てたが、源氏の君は「もの思ふと過ぐる月日も知らぬまに、年もわが世も今日や尽きぬる」（幻巻）といふ死を暗示した歌を詠んで幽渺の世界に雲隠れて行つた。

平安朝も初期は兎も角、その後は人々の間に内省的傾向が顕著になつた。そして自分の曲折に富んだ半生を回顧して、全体としての自己の半生を觀照する態度が生れた。この心静かに思ひ浮べた過去の感情生活の曲折の姿が、次第に意識の全面に濃く明かになると、それを具体化して表現しようといふ欲求に駆られる。かうして当時の日記文学は書かれた。作者が過去を思ひ浮べる、追憶の資料となつたものは、折々に書きとめて置いた和歌であつた。作者にはそれ／＼の私家集のやうなものがあつたと思はれる。斯くて日記は叙事的叙述の中心に和歌を挿入して抒情性を豊かにしてゐる。この点、歌物語と類似してゐる。個々の歌物語を時間的に配列すると、日記のやうでもある。また日記でも構想意識のもとに、全体が一つの纏つた世界として表現されてゐると、物語的なものになる。ただ歌物語は創作意識によつて書かれ、想像力によつて人生の断面を描いてゐるので、「世に多かるそらごと」も交り、虚構性がある。然し日記は自己の偽らぬ告白であり、実生活の偽らぬ姿が叙述してある。

源氏物語は、例へば若紫巻は源氏十八歳の三月から十月まで、末摘花巻は十八歳の三月から十九歳の春まで、紅葉賀巻は十八歳の秋から十九歳の秋までの記録といつたやうに、事件が同じ月日の間に並行的に叙述されてゐる部

分もあつて、嚴密な意味の日記とは言へないが日記的性質を帯びてゐる。また「時」の推移に伴なつて實際生活の中に生起する幾多の事件は、その間に有機的な緊密な關係が薄く、部分的には生動してゐるが短篇的物語の集積といつた感がないでもない。

さて先行の歌物語や日記文学に含まれてゐる抒情性が、「源氏」にも豊かに漲つてゐて、詩味の豊かな場面を隨所に展開してゐるのであるが、その抒情性を裏づけてゐるものは、和歌的精神であり、古典的趣味である。つまり和歌的詩境による、場面の構想や心境の描写が到る所に見られるのである。

更衣の死んだ後、悲嘆に暮れてゐた桐壺帝は、淋しい秋の風が吹き立つと共に、亡き更衣が恋しくて、輕負の命婦を使として、老母の家に遣はされた一節の、「野分たちて俄かに肌寒き夕暮の程、常よりもおぼし出づること多くて」といふ冒頭の句は、大伴家持が亡き妻を偲んで詠んだ、「空蟬の世は常なしと知るものを、秋風寒くしぬびつるかも」とある心境であり、古今集にも「いつとても恋しからずはあらねども、秋の夕は怪しかりけり」とある。帝は命婦を出かけさせた後、幽渺の思ひを誘ふ夕月の淡い光を眺めながら、更衣の在世時代を追憶し、「かうやうの折は、御遊などせさせ給ひしに、（更衣は）心ことなる物の音をかきならし、はかなく聞えいづる言の葉も、人よりは殊なりしけはひ容貌の、面影につとそひて思さるゝ」のであつた。万葉集には「夕されば物思ひまさる見し人の、言問ふ容儀面影にして」といふ歌がある。

夕顔巻の源氏の君が夕顔の家に泊つた夜明けのさまを叙した一節の、「八月十五日夜、隈なき月影、ひま多かる板屋残りなく洩り来て」の句は、「君まさで荒れたる宿の板間より、月の洩るにも袖はぬれけり」（六帖）の歌が

想ひ出されるし、「鳴る神よりもおどろ／＼しく踏みとどるかす」の句は、「天の原踏みとどろかし鳴る神も、思ふ中をばさくるものかは」（古今集）とある歌の語句によつたものであらう。明け方も近くなつて、隣の家で「御嶽精進にやあらむ、たゞ翁びたる声にぬかづく」のを聞いて、源氏の君は、「いと哀れに、朝の露に異ならぬ世を、何をむさぼる身の祈りにか」と思ふのであるが、古今集には「露をなど仇なるものと思ひけむ、わが身も草に置かぬ許りを」といふがある。仏典に「電光朝露」とある語句から、果敢ないものゝ代表として露を取り上げ、わが身も露も脆いことに於いては同じであるといふのである。源氏の君は女を誘つて近くの荒廢した別荘に享樂の一日を過しに行つた。そこは「荒れたる門のしのぶ草茂りて見上げられたる」のが、譬へやうもなく木暗い。古今集には「独のみ眺めふる屋のつまなれば、人をしのぶの草ぞ生ひける」といふがある。さてその別荘は、「いといたく荒れて、人目もなく、遙々と見渡されて、木立いと疎ましくもの古りたり。け近き草木などは、殊に見所なく、みな秋の野らにて、池も水草に埋れたれば、恐ろしげ」な風情であつた。かうした叙述の拠り所として、「君が行き氣長くなりぬ奈良路なる、島の木立も神さびにけり」（萬葉）「昔見し古きつゝみは年深み、池の水際に水草生ひにけり」（全上）「里は荒れ人は古りにし宿なれや、庭も離も秋の野らなる」（古今）の歌の歌境が、式部の心の中に想ひ浮べられてゐたに相違ない。

須磨巻で、源氏の君は「世の中いと煩はしく、はしたなき事のみまさ」るので、須磨の浦に世を避ける決心をした。然し「うきものと思ひ捨てつる世も、今はと住み離れなむことを思すには、いと捨て難きこと」が多かつた。中でも紫上が「旦暮にそへて思ひ歎き給へるさまの心苦しさは、何事にも勝れて哀れ」に思はれた。「行き巡りてもまた逢ひ見むことを必ずと思さむにてだに、なほひと日ふつ日の程、よそ／＼に明し暮らす折々」は覺束なき心

持で一杯であつたのに、「いく年としその程と限りある道にもあらず、逢ふを限りに隔たり行かむこと、定めなき世に、やがて別るべき門出にもやと」ひどく悲嘆に暮れるのであつた。「足曳の山のまにまに隠れなむ、憂き世の中はある甲斐もなし」(古今)と思つては見ても、いざその際になると、「世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには、思ふ人こそ絆なりけれ」(全上)で、愛人のために決心が鈍りもする。さて「別れてふことは色にもあらずに心にしみて侘しかるらむ」(全上)で、離別といふものは心にしみて悲しい。それがたとひ、「今日別れ明日はあふ身と思へども夜やふけぬらむ袖の露けき」(全上)で、明日は必ず逢ふことの出来る身だと決まつてゐても、今日の一日を、悲しみの涙で袖を濡らさずには居られないのである。殊に無常迅速の世であるから、今日の別れがやがて永遠の別れとならないとも限らない。さうした不安も手伝つて、離別は底知れず悲しい。「命だに心に叶ふものならば、何か別れの悲しからまし」(全上)といふ歌もある。かうした歌がこの折の源氏の君の心理描写に参与してゐはしまいか。また「行きめぐり」の句は「下の帯の道はかたぐゝ別るとも、行きめぐりても逢はむとぞ思ふ」(全上)の歌の句に、「逢ふを限りに」は「わが恋は行方も知らず果もなし、逢ふを限りと思ふばかりぞ」(全上)の歌によつたものである。

源氏の君は出発の日を間近に控へて、花散里の家を訪ねた。折柄、「月朧にさし出で、池ひろく、山木深きわたり、取集めて心細げに見ゆる」庭前の光景を眺めて、これから都を立つて行く「住み離れたらむ巖の中」を淋しく思ひやるのであつた。「鶏もしばし鳴くので帰りを急がれる。女は源氏の君の出掛けるのが、「月の入り果つる程」に擬せられて悲しい。月の光が女君の「濃き御衣にうつりて、げに濡るゝ顔」であつた。君は「思へば悲しや。たゞ知らぬ涙のみこそ心をくらすものなりけれ」などと仰つしやつた。「巖の中」は大きな岩の立ち繞らし

てゐる深い山奥で、憂き世を遁れゆく世界である。「いかならむ巖の中に住まばかは、世の憂きことの聞え来ざらむ」(古今)源氏の君の歸りが「月の入り果つる程」に擬せられたといふのは、「飽かなくに未きも月の隠るゝか、山の端逃げて入れずもあらなむ」(全上)の歌からの着想で、伊勢物語には、業平が惟喬親王のお供をして水無瀬の離宮に行つてゐた時、終日桜狩をして宮に歸つてから、「夜ふくるまで酒のみ物語りして、あるじの親王<sup>みかど</sup>酔ひて入り給ひなむとす。十一日の月も隠れなむとすれば」業平がこの歌を詠んだとある。なほ「濡るゝ顔」は、「合ひに合ひて物思ふ頃のわが袖に、宿る月さへ濡るゝ顔なる」(全上)「知らぬ涙」は、「ゆく先を知らぬ涙の悲しきは、たゞ目の前に落つるなりけり」(後撰)の歌によるものである。

源氏の君の須磨の浦の住居は、「行平の中納言の、藻塩たれつゝ佗びける家居近きあたり」であつた。「長雨の頃になりて、つれづれと京の事ども思しやらるゝに、恋しき人多く」源氏の君は、別れて来たかれこれの人達の許に手紙を書くのであつた。「さみだれに物思ひ居れば時鳥夜深く鳴きていづち行くらむ」(古今)「五月雨にながめくらせる月なれば、さやかに見えす雲隠れつゝ」(後撰)で、五月雨は佗びしいものであり、佗びしさ故に物思ひのまさるものとしたのが当時の歌心であつた。

須磨には秋がやつて来た。「いとゞ心づくしの秋風に」夜な々々浦波の音が近く聞えて、「またなく哀れなるものは、かゝる所の秋」であつた。源氏の君は「ひとり目をさまし給ひて」「涙落つとも覚えぬに枕浮くばかりに」なることも、度び／＼であつた。また夕暮は「雁の連ねてなく声」が「楫の音に紛」うて聞えて来た。秋は心づくしなものと歌にも詠まれてゐる。「木の間より洩れ来る月の影見れば、心づくしの秋は来にけり」(古今)夜ごとに聞える浦波の音に、「またなく哀れなるものは、かゝる所の秋なりけり」と感じたところがあるが、これは「山里は秋

こそ殊に侘びしけれ、鹿の鳴く音に目をさましつづ」(全上)の歌の、「鹿の鳴く音」を「浦波の音」に、山里を海辺にかへて言つたものであらう。また「枕浮く」の句からは、「秋ならで置く白露は寝覚めする、わが手枕の雫なりけり」(古今)「涙川水まさればや敷妙の枕の浮きて止まらざるらむ」(拾遺)などの歌が思ひ浮べられるし、雁の声を楫の音に擬するのは、「秋風に声をほにあげて来る舟は、天のと渡る雁にぞありける」(古今)の歌によるものである。

初音巻に、紫上の住居の庭前の趣を叙して、「梅の香も御簾のうちの匂ひに吹きまがひて」とあるのは、「宿近く梅の花植えじあぢきなく、待つ人の香にあやまたれけり」(古今)「色よりも香こそ哀れとおもほゆれ、誰が袖ふれし宿の梅ぞも」(全上)などと詠んでゐるやうに、薫物たきものの香と梅の花の匂ひとは、区別のつかないものだとしたのが、当時の詩的常識であつた。また「花の香さそふ風のどかにうち吹きたるに」といつてゐるのは、「花の色は霞にこめて見せずとも、香をだに盗め春の山風」(古今)「霞立つ春の山辺は遠けれど、吹き来る風は花の香ぞする」(全上)などの歌境が根柢になつてゐるものである。

源氏物語には到る所に美しい自然が描かれてゐる。それは人事の背景としてよりも、人間生活の中に深く織り込まれて、感情の動きと密接不離の關係に置かれてゐる。然もそこに取り上げられてゐる自然は、和歌の世界のものであり、和歌の題材となつてゐる典型的風物だけが、優雅哀艶な情調に包まれて描写されてゐる。春が巡つて来ると、「いつしかと気色だつ霞に、木の芽もうちけぶり」(初音巻)「朝ぼらけのたどならぬ空に、百千鳥の声もうらゝかなり」(若菜卷上)「御前近き若木の梅、心もとなく蕾みて、鶯の初声いとおほどかなるに」(竹河卷)で、

霞、木の芽、百千鳥の囀り、梅、鶯が季節を代表するものとして取り上げられてゐる。古今集にも「霞立ち木の芽も春の」とか、「百千鳥さえづる春は」など詠まれてゐる。六条院の春の庭の眺めを叙した「此方彼方霞みあひたる梢ども、錦を引きわたせるに、御前の方は遙々と見やられて、色をましたる柳、枝を垂れたる花も、えもいはぬ匂ひを散らせり。ほかには盛り過ぎたる桜も、今さかりには、笑み、廊を繞れる藤の色も、こまやかに開けゆきけり。まして池の水に影をうつしたる山吹、岸よりこぼれていみじき盛りなり」(胡蝶巻)などいふ文章を見ても、和歌に詠まれてゐる景物だけが集められてゐる。

秋の叙景では、「日入り方になりゆくに、空の景色も哀れに霧渡りて、山の蔭はを暗き心地するに蛸鳴きしきりて」(夕霧巻)「風いと心細う更けゆく夜の気色、虫の音も鹿の鳴く音も滝の音も一つに乱れて艶なる程なれば」(全上)「時雨うちして荻の上風もたゞならぬ夕暮に」(少女巻)「霧の籬より花の色々面白く見え渡る中に、朝顔のはかなげにて交りたるを」(宿木巻)「枯れ枯れなる前栽の中に、尾花の物より殊に手をさし出でて招くが」(全上)とあるやうに、和歌的風物だけが季節のものとして観照の対象になつてゐる。

だから源氏物語に描かれてゐる自然は、現実のまゝの姿ではない。たゞほのかに美しい情趣を漂はせてゐる風物だけが、季節々々の自然を代表するものとされ、それが生活感情と深く融け合つて、美しい抒情詩の世界を繰り展げてゐる。

随つて源氏物語の作者の自然観照は、和歌的趣味によつて色づけをされ、文化的伝統によつて、その性格が規定されてゐる。「暮れゆくまゝに、今日にとちむる霞の気色も、あわたしく乱るゝ夕風に、花の蔭いと立つこと易からで、人々いたく酔ひ過ぎ給ひて」(若葉巻下)の一節を見ても、「春の着る霞の衣ぬきを薄み、山風にこそ

乱るべらなれ」(古今) 「今日のみと春を思はぬときだにも、立つこと易き花の蔭かは」(全上) の歌の心が想ひ浮べられる。「ゆゑある黄昏時の空に、花は去年のふる雪思ひ出でられて、枝も撓むばかり咲き乱れたり。ゆるらかにうち吹く風に、えならず匂ひたる御簾の内の薫<sup>かき</sup>も吹き合せて、鶯誘ふまにしつべく、いみじき御殿のあたり匂ひなり」(全上) 「春立てば花とや見らむ白雪の、かゝれる枝に鶯の鳴く」(古今) 「心ざし深くそめてし折りければ、消えあへぬ雪の花と見ゆらむ」(全上) で、雪を花と見るのは当時の詩的常識であつた。また梅の香と薫物の香との相似性を認めたのも、古典的趣味で、「色よりも香こそ哀れと思ほゆれ、誰が袖觸れし宿の梅ぞも」(全上) 「宿近く梅の花植ゑじあぢきなく、待つ人の香にあやまたれけり」(全上) などと詠んでゐる。だから薫物の香が鶯誘ふつまにもなる訳で、「折りつれば袖こそ匂へ梅の花、ありやとこゝに鶯の鳴く」(全上) ともある。「袖こそ匂へ」は薫物の匂ひである。

「秋にもなりぬ。初風涼しく吹き出でて、せこが衣もうら淋しき心地し給ふに………五日六日の夕月夜は疾く入りて、すこし曇れる気色、萩の音もやうく哀れなる程になりけり」(篝火卷) 「せこが衣」は、「初風の涼しく吹けばわが背子が、衣の裾のうらぞ淋しき」(六帖) の歌によるものであらうが、古今集にも、「わが背子が衣の裾を吹きかへし、うらめづらしき秋の初風」ともある。「萩の音」は、「いとゞしく物思ふ宿の萩の葉に、秋と告げつる風の伝しき」(後撰) 「萩の葉にそよぐ音こそ秋風の、人に知らるゝ始めなりけれ」(拾遺) など詠まれ、また「秋はなほ夕まぐれこそたゞならね、萩の上風萩の下露」(孟津) で、萩の上葉を吹く風の音は悲寥の情を誘ふものとされた。

要するに紫式部の自然観照は、和歌的趣味の範圍を出でない。随つて自然そのものの有りの儘の姿が描かれない



で、情趣的な一面だけが取り出され、それが人物の内面的な動きといみじくも調和し、奥深く融合してゐる。

「うた」と「かたり」一つは抒情性、一つは叙事性のものに源流を発したわが国の文学は、一方では抒情詩としての万葉集にまで発展し、一方では古事記や風土記に記載されてゐる説話となつて今日まで残つてゐる。然し万葉集の中には伝説を歌つた物語詩があるし、中臣宅守と茅上娘子との六十三首に及ぶ贈答歌や、日記的に配列されてゐる家持の歌などがあつて、それらの歌を通して、或は恋愛生活に於ける心情や曲折の時間的展開や、個人生活の推移などを窺ふことが出来、既に物語的なものに対する興味の動いてゐたことが想像される。殊に「青みづら依網の原に人もあはぬかも、石走る淡海県の物語せむ」といふ歌もあつて、物語に興味を持つてゐたことがわかる。

また一方、説話の中には歌謡を含むものが多い。それらの歌謡は本来は説話とは別のものであつたらうが、説話が語り継ぎ言ひ継ぎされてゆく過程に於いて、いつの間にか説話の中に包摂されて、説話に抒情性を附与する役目を果してゐる。

斯様に抒情詩である万葉集の中に、既に叙事的なものに興味を持つ傾向が窺はれると共に、叙事的基盤に立つ説話の中に抒情的分子が混在してゐた。この事實は、以後の文学の展開が、叙事性と抒情性との握手交流にあることを暗示してゐるのである。

平安朝になつて伊勢物語なる歌物語が生れた。これは叙事性と抒情性とのいみじき統一融合であつて、この歌物語の性格が以後の物語文学の性格を規定してゐるのである。この歌物語の散文的部分に於いて迂余曲折に富んだ複雑な事件の推移展開を叙述し、事件の推移に伴ふ微妙な心情の動きを、感覺的世界との交流融合の姿に於いて描写

し、昂められた情感を和歌によつて表現させてゐるところに源氏物語の姿がある。かく源氏物語はその形態に於いても、また内容に在つても、歌物語的であり日記的性質を帯びてゐるのであるが、更に自然描写や心理描写に於いても、古典的教養によつて培はれた觀照が基礎になつてゐる、和歌的趣味が全篇に横溢してゐる。かくて源氏物語は在来の和歌文学、歌物語文学、日記文学などの綜合の上に生れた、優れた抒情的叙事文学であると言ふことが出来る。

附記。紙数の關係から詳述することが出来ないで不完全なものに終つたことをお詫びします。